



日本植物病理学会ニュース 第89号

(2020年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

令和元年度の日本植物病理学会北海道部会は10月17～18日の2日間、「かでの2・7」(札幌市)において開催され、107名(一般77名、学生30名)の参加があった。

初日には第226回談話会が開催され、「北海道の気候変動と植物病害の変化」と題して4名の方にご講演いただいた。以下にタイトルと演者を紹介する。「北海道の気候変動とワイン用ブドウの病害について」(農研機構北海道農業研究センター 根本学氏)、「気候変動がバレイシヨ病害に及ぼす影響と育種的対応」(農研機構北海道農業研究センター 浅野賢治氏)、「イネ科植物いもち病菌の分類と病原性変異リスク診断の可能性」(帯広畜産大学 中馬いづみ氏)、および「コムギ眼紋病の発生が減ったのはなぜか」(道総研農業研究本部 竹内徹氏)。植物病害の発生は気象条件と密接に関わっており、近年の気候変動の影響を様々な場面において感じるようになってきていたが、農業気象の専門家である根本氏のご講演をはじめ、これまでに現れた影響と今後の予測について理解を深めることができ、有意義な談話会であった。

2日目の一般講演では、17題の発表があり、内訳は菌類病が6題、ウイルス・ウイロイド病が11題であった。次年度の北海道部会は、令和2年10月15～16日の2日間、北海道農業研究センター(札幌市)において開催予定である。(相馬 潤)

(2) 東北部会

令和元年度日本植物病理学会東北部会は、9月24～25日に秋田ビューホテル(秋田市)にて開催され、一般42名、学生36名(合計78名)の参加があった。

講演発表は、糸状菌病4題、ウイルス・ウイロイド病9題、植物保護5題の合計19題で有り活発な議論・情報交換が行われた。初日の一般講演後に、「植物寄生菌類と病

害の発生生態研究の40年」と題して、秋田県立大学生物資源科学部の古屋廣光氏の特別講演が行われた。幹事会・総会では次年度部会長に山形大学農学部の高谷修氏が選出された。また、本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、宮城県古川農業試験場の宮野法近氏「いもち病真性抵抗性遺伝子Pibを持つ品種・系統のいもち病圃場抵抗性の評価について」に授与された。令和2年度は岩手県での開催が予定されている。(藤 晋一)

(3) 関東部会

令和元年度日本植物病理学会関東部会は、9月19～20日の2日間にわたり、東京大学農学部(東京都文京区)の農一号館で開催された。参加者は、名誉・永年会員3名、一般会員79名、学生73名(合計155名)であった。講演題数は32題で、その内訳は菌類病関係12題、ウイルス・ウイロイド病関係7題、細菌・ファイトプラズマ病関係10題、植物保護関係3題であった。各講演の質疑応答も活発に行われ、盛況であった。

また、19日の午後には、特別講演として、埼玉大学理工学研究科の豊田正嗣氏に「グルタミン酸受容体/カルシウムシグナルを介した植物の全身性傷害応答」の演題でご講演いただき、植物が局所的なストレスを感知し、その情報を遠く離れた器官に秒から分のスケールで短時間のうちに伝搬させる機構を関連分子の可視化技術とその検出系の開発により明らかにした興味深い研究の紹介があり、大変好評であった。

懇親会は、東京大学生協農学部食堂部において行われ、元会長桑田茂氏の乾杯のご発声ではじまり、和やかな中にも活発な議論・情報交換が行われた。20日の一般講演終了後には同会場において第14回若手の会が開催され、大いに盛り上がった。今年度より学生優秀発表賞の選考が行われ、尾形朋美氏(筑波大学)、齊藤大幹氏(東京農工大学)、Novianti Fawzia氏(東京農工大学)および鈴木大河氏(東京農工大学)が受賞された。令和2年度は千葉大学での開

催が予定されている。

(宇垣正志)

(4) 関西部会

令和元年度日本植物病理学会関西部会は、9月19～20日の2日間、滋賀県彦根市の滋賀県立大学において開催された。会場までのアクセスが不便なため、参加者の減少が懸念されたが、234名もの参加があり、盛会となった。一般講演に先立ち、役員会および総会において、次期部会長に香川大学の秋光和也氏が選出された旨報告があり、承認された。また、次年度の部会は、令和2年8月31日～9月1日に島根大学において開催されることが決定された。総会終了後に、今年度部会長の一瀬による部会長講演「植物病原細菌のべん毛糖鎖を介した植物相互作用」が行われた。引き続き、一般講演が3会場に分かれて行われ、活発な質疑応答が交わされた。講演の内訳は感染生理46題、分類・同定・診断16題、発生生態5題、防除14題、その他4題の合計85題であった。

19日の一般講演後には、同じ会場において情報交換会が開催され、活発な議論となごやかな懇談が行われた。今回の部会は、滋賀県立大学鈴木一実開催地委員長、泉津弘佑開催地幹事をはじめ滋賀県の農業技術振興センター、大学および民間企業の植物病理関係者および協賛団体のご尽力と絶大なるご協力によって成功裏に開催することができた。ここに記して、厚く御礼申し上げます。(一瀬勇規)

(5) 九州部会

令和元年度日本植物病理学会九州部会は、大分市のソレイユにおいて、11月6日に第70回講演会(九州病害虫研究会と共催)が、約90名の参加者のもとで盛大に開催された。一般講演はウイルス病関連4題、細菌病関連2題、菌類病関連10題の合計16題で、活発な質疑応答が行われた。合わせて企画された平成30年度地域貢献賞の受賞者講演では、河野伸二氏(沖縄県農業技術センター)が「沖縄県に発生する植物病の診断と防除に関する研究」の演題で、植物ウイルス病とカンキツグリーンング病などの研究の歴史と現状を、自身の経験を踏まえ講演され、大変有意義であった。幹事会では、庶務会計報告、令和元年度九州部会賞授賞者等について審議された。本年度は学生発表が3題であり、学生優秀発表賞の選考は実施されなかった。令和2年度日本植物病理学会大会運営委員長の鹿児島大学理事の岩井久氏から、準備状況の報告がなされた。また、宮崎大学の竹下稔氏から、令和3年度植物感染生理談話会が宮崎県で開催予定であることが報告された。総会においては、山口純一郎氏(佐賀県)が地域貢献賞をめでたく受

賞された。引き続き開催された祝賀会は、松崎正文氏の乾杯のご発声で始まり、活発な議論や情報交換がなされ、盛会のうちに田代暢哉氏の手締めの音頭でお開きとなった。最後に部会開催にご尽力いただいた大分県関係者はじめ関係各位に厚くお礼申し上げる。次回は福岡県福岡市で開催される予定である。(古屋成人)

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) EBC 研究会ワークショップ 2019

令和元年9月18日(水)10:00～17:00にEBCワークショップ2019(第15回)が、東京大学農学部1号館2階8番教室(文京区弥生)において開催された。今回のワークショップも102名という多数の参加者を得て盛況であった。

午前は第一部『線形回帰による病害発生生態解明』として、農研機構西日本農業研究センターの川口章氏による「線形回帰と統計モデリングの基礎」、群馬県農政部技術支援課の池田健太郎氏による「一般化線形モデルを活用した病害防除指導の取り組み」および愛知県農業総合試験場の恒川健太氏による「病害虫発生予察調査データを活用したコムギ赤さび病多発要因の検討」の3題の講演があった。川口氏の人工知能分野と絡めた線形回帰と統計モデリングの基礎に関する講演から始まり、池田氏はコンニャク根腐病、恒川氏はコムギ赤さび病を対象に、一般化線形モデルを活用した解析方法や多発要因を検討した事例の紹介があった。参加者、特に学生や大学院生からは基礎から線形回帰を活用した病害の発生生態解明の事例までを学ぶ良い機会となり好評であった。

午後は、まず第二部『招待講演』として3題の講演をいただいた。同志社女子大学教授の杉浦実先生による「 β -クリプトキサンチンの機能性研究と科学的エビデンスについて」では、 β -クリプトキサンチンは日本のウンシュウミカンに特徴的に多く含まれているカロテノイド色素で、これまで明らかとなった様々な生体調節機能と食品の機能性研究で重要な科学的エビデンスのレベルとその活用方法について紹介いただいた。日本曹達(株)の山本敦司氏による「殺虫剤抵抗性管理：高薬量保護区戦略のケーススタディと最近の研究動向」では、高薬量保護区戦略の概念から普及への課題について、殺ダニ剤ヘキシチアゾクス抵抗性管理の研究事例を中心に、最近の殺虫剤抵抗性管理の研究動向を紹介いただいた。さらに平成30年度若手農林水産研究者表彰受賞記念講演として同賞を受賞された岩手県農業研究センターの岩館康哉氏による「キュウリホモプシス根腐病の総合防除対策の確立」では、キュウリホモプシス根

腐病に対する防除技術の開発と体系化として、農業改良普及センターと一体となった現地実証先行型の取り組みにより、総合防除対策の構築と成果普及を迅速に展開した事例を紹介いただいた。

休憩後の第三部『ショートトーク』では6題の講演があり、まず各地域での病害研究への取り組みとして3題、JAあいち経済連の三宅律幸氏から「AUDPCも知らないで、ポーッと生きてんじゃねーよ!」、長崎県農林技術開発センターの中村吉秀氏から「タマネギベと病の一次伝染株初発時期の積算温度による推定」、香川県農業試験場の西村文宏氏から「ブロッコリー黒すす病、イチゴうどんこ病の空間分布解析」、さらに上市されている殺菌剤の効果的な使用に向けた最新の知見として、日本農薬(株)の富田啓文氏から「SDHI剤の概要」、同社の山田麻貴氏から「汎用性殺菌剤ピラジフルミド(パレード®)の特長と上手な使い方」、バイエルクロップサイエンス(株)の戸田彩香氏から「オルフィンフロアブルについて」の3題の講演があった。講演終了後は、限られた時間ではあったが川口章氏が座長となり演者と参加者による活発な議論による総合討論でワークショップは幕を閉じた。

今回もここ数年と同様に多数の参加者に恵まれ、有意義なワークショップが開催できたことは、参加者と講師の皆さん、会場の確保にご尽力いただいた東京大学教授の山次康幸先生、さらに当研究会運営委員諸氏の多大な協力によるものであり、紙面をお借りしてお礼を申し上げます。以上、EBC研究会ワークショップ2019の開催報告とさせていただきます。(篠原弘亮)

(2) 第13回植物病害診断研究会

第13回植物病害診断研究会は、令和元年11月1日に兵庫県南あわじ市の吉備国際大学南あわじ志知キャンパスで開催された。87名(会員46名・非会員41名)もの方に参加いただいた。参加者の所属別内訳は、大学25名、農研機構7名、都道府県農試18名、病害虫防除所11名、企業24名、その他団体2名であり、植物病害診断に実際に関連する方々の参加が多く見受けられた。特に今回は、参加者の中で診断経験が5年未満の方が約50%を占めた。

研究会では、7名の演者による講演と総合討論が行われた。まず、神戸大学農学部の中野幸雄氏から「今後侵入を警戒しなければいけない病害-コムギいもち病」と題して、海外で大きな被害を出しているコムギいもち病の発病様式と発生の拡大について講演いただいた。大阪府立大学生命環境科学研究科の東條元昭氏からは「ピシウム菌の発生生態と防除」と題して、*Pythium*属菌の分離、同定ならびに

検出法に関する最新知見について講演いただいた。吉備国際大学農学部の村上二郎氏から「レタスビッグベインウイルスを媒介するオルピディウムの土壌からの直接検出」と題して、土壌中の媒介菌の定量とビッグベイン病発生との関係について講演いただいた。兵庫県立農林水産技術総合センターの神頭武嗣氏からは「病害虫高度診断・防除研究拠点について」と題して、令和元年度に兵庫県に完成した病害診断拠点の今後の運営とその役割について講演いただいた。

続いて、各県での診断事例として、三重県農業研究所の川上拓氏から県内での診断結果の内訳やトマト黄化病および各種青枯病を例とした診断事例の報告をいただいた。高知農業技術センターの下元祥史氏からは、高知県で発生したシノモザイク病、トルコギキョウえそ輪紋病およびシントウガラシ退緑病の診断経緯について報告いただいた。兵庫県立農林水産技術総合センターの内橋嘉一氏からは、県内の植物病害診断体制と診断の成功事例と失敗事例を報告いただいた。

総合討論では、法政大学生命科学部の濱本宏氏の司会のもとで、病害診断データの取り扱い、情報の共有化および人的ネットワークについて議論した。研究会の運営にあたっては、兵庫県立農林水産技術総合センター、吉備国際大学南あわじ志知キャンパス事務局ならびに植物病理学研究室の皆様にご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げます。(相野公孝)

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

松下陽介氏(農研機構野菜花き研究部門)が、令和元年度(第15回)「若手農林水産研究者表彰」(農水省農林水産技術会議事務局主催)で農林水産技術会議会長賞を受賞されました。本賞は、農林水産業および関連産業に関する研究開発の一層の発展および研究開発に従事する若手研究者の研究意欲の一層の向上を図るため、優れた功績をあげた若手研究者を表彰するものです。受賞の対象となった研究業績は「侵入警戒を要するウイロイドの防除に関する研究」です。ナス科植物の重要病原体であるポスピウロイド属の防除マニュアルを作成し、同属のトマト退緑萎縮ウイロイド発生地での根絶に成功しました。また、同属のジャガイモやせいもウイロイドの国内初発生を確認し、主な侵入経路である種子伝染機構を世界で初めて解明することで、種苗検査体制の強化に寄与されました。(足立嘉彦)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換すること

を趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、足立嘉彦、大島研郎、池田健太郎、久保田健嗣

編集後記

明けましておめでとうございます。新年にあたり、会員の皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りいたします。

学会ニュース第 89 号をお届けします。本号は、部会の開催報告と研究会・談話会の開催報告を中心に掲載しました。

北海道、東北、関東、関西、九州、いずれの部会も参加者多数で盛会裡に開催されました。北海道部会では「北海道の気候変動と植物病害の変化」と題して、植物病害の発生に対する気象のこれまでに現れた影響と今後の予測についての談話会が行われています。また、東北部会では「植

物寄生菌類と病害の発生生態研究の 40 年」、関東部会では「植物の局所的なストレス感知と情報伝搬機構の可視化技術」、関西部会では「植物病原細菌のべん毛糖鎖を介した植物相互作用」として特別講演が行われています。一般講演での活発な質疑応答とともに、談話会や特別講演でも有益な情報交換が行われたようです。さらに東北部会と九州部会では地域貢献賞等の授与が行われています。

EBC 研究会ワークショップが 9 月に東京大学で、植物病害診断研究会が 11 月に吉備国際大学あわじ志知キャンパスで行われました。多くの方が参加され、興味深い講演と話題提供を受けて熱心な質疑応答、討論が行われたようです。会の開催や運営にご尽力いただきました関係の皆様、ご参加された皆様に、学会活性化へのご協力に感謝申し上げます。

昨秋、松下陽介氏が「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。誠にうれしいお知らせです。おめでとうございます。今後益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

今年も本欄では学会関連の、多種多様な情報をご提供したいと思っております。引き続きのご愛読と情報の提供をお願いいたします。
(藤田佳克)
